現代文学研究
情報と資料

愛蔵版

編集　長谷川　泉

至文堂

現代文学研究 情報と資料

編集 長谷川 泉

現代文学研究　情報と資料　愛蔵版

昭和62年9月25日発行　編集　長谷川 泉　発行所　至文堂

東京都新宿区西早稲田2-11-13　03（208）2251（営業）　発行者　黒河内 平

ISBN4-7843-0074-0　C1091

現代文学研究　情報と資料　目次

作品論と作家論　長谷川　泉……7

文学史的視点　平岡　敏夫……11

文学史的視点とは何か…11／「文学史」とは何か…11／ナショナルな発想とテーヌ受容…12／ブリュンチェール受容とジャンル発展説…14／ヤウス『挑発としての文学史』の視点…16／さまざまな文学史的視点…17

比較研究　剣持　武彦……18

比較研究の分野…18／日本文学内での比較研究の例…19／日本文学と外国文学の比較研究の例…20／比較研究の相互乗り入れ…21／比較研究と

語学…22／結び…23

訓詁・注釈　板坂　元……25

近代文学の訓詁注釈前史…27／近代文学訓詁注釈の確立…29

文体論の視角　中村　明……32

文体論のいろいろ…32／言語分析の位置づけ…34／人のいる文体論…38

記号学・構造分析的視点から　篠田浩一郎……39

〈都市空間〉からの読み　前田　愛……46

〝語り〟の構造　小森　陽一……53

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

——作者の「死」…53／〈話者〉と〈語り手〉…54／〈語り手〉と作中人物…55／〈語り手〉と読者…57

文学的コミュニケーションの視圏　菊池　武弘……60

テクスト産出の局面で…61／テクスト内部の諸要因…62／テクスト受容の局面で…65

〈文体学〉からのアプローチ　篠沢　秀夫……67

文体学的円環…68／文体素…69／心象（心象の種類…71／心象の機能…72／心象の段階…72）／作品の構造…73／基層…73

文献探索入門私記——同気相求める　高橋新太郎……74

文献案内——論文・リポート作製の手引　高橋新太郎……78

あ行

會津八一（武川忠一）81
青野季吉（上田正行）82
阿川弘之（日笠祐二）84
秋田雨雀（みなもとごろう）85
秋元不死男（平井照敏）87
芥川龍之介（菊地弘）88
安部公房（武田勝彦）91
阿部知二（福田久賀男）93
網野菊（小坂部元秀）95
鮎川信夫（北川透）96
荒正人（和泉あき）97
有島武郎（佐々木靖章）98
有吉佐和子（中村友）101
安西冬衛（明珍昇）102
飯田蛇笏（松本旭）103
生田長江（森本修）103
石川三四郎（唐沢柳三）104
石川淳（塩崎文雄）105
石川啄木（助川徳是）107
石川達三（久保田芳太郎）111
石坂洋次郎（森英一）113
石田波郷（松本旭）115
石橋忍月（嘉部嘉隆）116
石原吉郎（由良君美）117
泉鏡花（渡辺一考）118
五木寛之（松本鶴雄）120
伊藤左千夫（永塚功）122
伊東静雄（田所周）123
伊藤整（早川雅之）124
稲垣足穂（保昌正夫）126
井上ひさし（扇田昭彦）128
井上光晴（黒古一夫）130
井上靖（藤本千鶴子）132
井伏鱒二（涌田佑）134
岩野泡鳴（伴悦）136
上田広（高崎隆治）138
上田敏（清田文武）139
魚住折蘆（坂上博一）141
内田百閒（内田道雄）142
内田魯庵（吉田悦志）144
内村鑑三（武田友寿）145
宇野浩二（榎本隆司）147
宇野千代（大久保典夫）149
生方敏郎（上木敏郎）150
梅崎春生（古林尚）151
海野十三（池田浩士）153
江藤淳（菊田均）154
江戸川乱歩（長沢隆子）156
円地文子（小笠原美子）158
遠藤周作（佐藤泰正）160
大江健三郎（永島貴吉）162
大岡昇平（池田純溢）164
大岡信（藤井貞和）166
大杉栄（石丸晶子）167
大田洋子（江種満子）168
大庭みな子（江種満子）169
岡倉天心（大岡信）170
岡本かの子（近藤裕子）172
岡本綺堂（杉本優）174
小川国夫（利沢行夫）176
小川未明（紅野敏郎）178
荻原井泉水（唐沢柳三）179
小熊秀雄（黒古一夫）180
小栗風葉（岡保生）181

小栗虫太郎（中島河太郎）182
尾崎一雄（唐井清六）183
尾崎紅葉（土佐亨）185
尾崎士郎（都築久義）187
尾崎放哉（栗田靖）189
小山内薫（上田浩二）190
大佛次郎（村上光彦）191
押川春浪（池田浩士）193
織田作之助（矢島道弘）195
折口信夫（藤井貞和）197

か行

海音寺潮五郎（高崎隆治）199
開高健（吉田永宏）201
葛西善蔵（大森澄雄）203
梶井基次郎（樫原修）205
加藤楸邨（平井照敏）207
仮名垣魯文（小池正胤）208
金子光晴（櫻本富雄）210
金子洋文（茅原健）211
加能作次郎（坂本政親）213
嘉村礒多（大森澄雄）214
亀井勝一郎（神谷忠孝）215
茅原華山（茅原健）216
唐十郎（扇田昭彦）217
川上眉山（伊狩章）218
川崎長太郎（石阪幹将）219
川端康成（羽鳥徹哉）220
河東碧梧桐（栗田靖）223
上林暁（森晴雄）224
蒲原有明（野山嘉正）225
菊池寛（浅井清）226
岸田國士（鈴木夫佐子）228
貴司山治（浦西和彦）230
北川冬彦（安藤靖彦）231
北原武夫（鈴木晴夫）232
北原白秋（中島国彦）234
北村透谷（佐藤善也）236
北杜夫（小久保実）238
木下順二（向井芳樹）239
木下尚江（山田貞光）240
木下杢太郎（林廣親）242
木下利玄（日笠祐二）244
金史良（安宇植）245
金達寿（金子博）246
草野心平（安藤靖彦）247
国枝史郎（池田浩士）248
国木田独歩（芦谷信和）249
久保栄（西村博子）251
窪田空穂（篠弘）253
久保田万太郎（網野義紘）254
久米正雄（大西貢）256
倉田百三（田中実）257
倉橋由美子（高野斗志美）258
蔵原惟人（草部典一）260
黒岩涙香（伊藤秀雄）262
黒島伝治（高橋春雄）264
黒田三郎（唐川富夫）265
小泉八雲（遠田勝）266
幸田文（橋詰静子）268
幸田露伴（二瓶愛蔵）269
河野多恵子（近藤裕子）272
小島信夫（大橋健三郎）274
小杉天外（畑実）277
小林多喜二（国岡彬一）278
小林秀雄（清水孝純）280

小松左京（池田浩士）282
五味川純平（清原康正）283

さ行

西東三鬼（平井照敏）285
斎藤茂吉（藤岡武雄）286
斎藤緑雨（塚越和夫）288
坂口安吾（花田俊典）289
佐々木邦（鈴木二三雄）291
佐多稲子（長谷川啓）293
佐藤春夫（高橋世織）295
里見弴（高橋新太郎）298
里村欣三（高崎隆治）299
三遊亭円朝（延広真治）300
椎名麟三（佐藤泰正）302
志賀直哉（紅野敏郎）304
獅子文六（香内信子）307
司馬遼太郎（山野博史）309
島尾敏雄（磯貝英夫）311
島木赤彦（武川忠一）313
島木健作（高橋春雄）314
島崎藤村（剣持武彦）316
島村抱月（山本昌一）319
庄野潤三（鷺只雄）320
白井喬二（尾崎秀樹）322
薄田泣菫（野山嘉正）324
鈴木三重吉（根本正義）325
瀬戸内晴美（鈴木晴夫）327
芹沢光治良（羽鳥徹哉）328
千家元麿（分銅惇作）330
相馬御風（千葉俊二）331

た行

田岡嶺雲（西田勝）332
高野素十（倉田紘文）333
高橋和巳（立石伯）334
高橋たか子（永井和子）336
高浜虚子（本井英）337
高見順（奥出健）339
高村光太郎（北川太一）341
高山樗牛（小野寺凡）343
瀧井孝作（小坂部元秀）345
竹内好（上木敏郎）346
武田泰淳（清水孝純）348
武田麟太郎（保昌正夫）350
太宰治（東郷克美）352
立原正秋（武田勝彦）355
立原道造（成田孝昭）356
田中千禾夫（菅井幸雄）359
田中英光（島田昭男）360
谷川俊太郎（北川透）362
谷崎潤一郎（平山城児）363
種田山頭火（栗田靖）367
田村泰次郎（大久保典夫）368
田村俊子（渡辺澄子）369
田山花袋（小林一郎）370
近松秋江（紅野謙介）372
つか こうへい（菅孝行）374
塚本邦雄（政田岑生）376
辻邦生（菅野昭正）377
辻潤（佐々木靖章）379
土田杏村（上木敏郎）380
筒井康隆（助川徳是）382
坪内逍遙（青木稔弥）384
坪田譲治（鳥越信）386
寺田寅彦（荻久保泰幸）387

寺山修司（宇波　彰）388
徳田秋声（榎本隆司）389
徳冨蘆花（中村青史）391
徳永　直（浦西和彦）393
豊島与志雄（関口安義）394

な行

直木三十五（大西　貢）396
永井荷風（坂上博一）398
永井龍男（馬渡憲三郎）400
中上健次（神谷忠孝）402
中　勘助（渡辺外喜三郎）404
中里介山（尾崎秀樹）405
中島　敦（佐々木　充）407
長塚　節（大戸三千枝）409
中野重治（松下　裕）410
中原中也（原　子朗）412
中村吉蔵（中村雄蔵）415
中村草田男（坪内稔典）416
中村真一郎（小久保　実）417
中村光夫（菅野昭正）419
長与善郎（田中榮一）421
夏目漱石（石井和夫）423
成島柳北（石丸　久）426
新美南吉（鳥越　信）427
西脇順三郎（由良君美）428
丹羽文雄（馬渡憲三郎）429
野上彌生子（渡辺澄子）431
野坂昭如（久保田芳太郎）433
野間　宏（林原純生）435
野村胡堂（山蔦　恒）437

は行

萩原朔太郎（佐藤房儀）439
長谷川伸（縄田一男）441
長谷川天溪（畑　実）443
花田清輝（池上富子）444
埴谷雄高（白川正芳）446
浜田廣介（向川幹雄）448
林京子（平山三男）449
林房雄（国岡彬一）450
林不忘（尾崎秀樹）454
林芙美子（熊坂敦子）452
葉山嘉樹（浦西和彦）454
原民喜（河内光治）456
樋口一葉（野口碩）458
久生十蘭（山田昭夫）462
日夏耿之介（井村君江）463
火野葦平（山田輝彦）465
日野草城（坪内稔典）467
平沢計七（大和田茂）468
平野謙（布野栄一）469
平林たい子（中尾務）470
平林初之輔（池田浩士）472
廣津和郎（橋本迪夫）473
広津柳浪（塚越和夫）475
深沢七郎（赤尾利弘）477
福沢諭吉（山本昌一）479
福田恆存（今里智晃）481
福永武彦（源高根）483
藤枝静男（遠丸立）485
二葉亭四迷（寺横武夫）486
舟橋聖一（藤井淑禎）488
別役実（菅孝行）491
北条民雄（勝又浩）492
星新一（山野浩一）493

堀田善衛（吉田永宏）495
堀口大学（河村政敏）497
堀辰雄（池内輝雄）499
本庄陸男（山田昭夫）501

ま行

前田河広一郎（紅野敏郎）502
前田普羅（松井利彦）502
前田夕暮（武川忠一）503
牧野信一（薬師寺章明）504
正岡子規（松井利彦）505
正宗白鳥（佐久間保明）507
松本清張（助川徳是）509
真船豊（菅井幸雄）510
真山青果（みなもとごろう）512
丸山健二（荻原雄一）514
三浦哲郎（水谷昭夫）515
三木露風（杉本邦子）517
三島由紀夫（武田勝彦）518
水原秋桜子（松井利彦）520
水上瀧太郎（橋本迪夫）521
水上勉（玉城正行）522
宮沢賢治（渡部芳紀）524
宮嶋資夫（黒古一夫）527
宮地嘉六（大和田茂）528
宮本百合子（沼沢和子）529
三好十郎（高橋新太郎）531
三好達治（小野隆）532
武者小路実篤（遠藤祐）533
村野四郎（原子朗）535
室生犀星（大橋毅彦）537
森鷗外（長谷川泉）539
森田草平（根岸正純）543
森本薫（阿部到）544

や行

八木重吉（安西勝）545
安岡章太郎（佐藤昭夫）546
保田與重郎（白石喜彦）548
安成貞雄（福田久賀男）550
柳田国男（山野博史）551
矢野龍渓（畑有三）553
山川方夫（田中実）554
山口誓子（倉田紘文）555
山田美妙（山田有策）556
山田風太郎（池田浩士）557
山中峯太郎（尾崎秀樹）558
山之口貘（仲程昌徳）559
山村暮鳥（和田義昭）560
山本周五郎（木村久邇典）561
山本有三（佐々木浩）563
横溝正史（中島河太郎）565
横光利一（由良君美）566
与謝野晶子（逸見久美）568
与謝野鉄幹（野山嘉正）570
吉井勇（阿部正路）571
吉川英治（塚越和夫）573
吉田一穂（原崎孝）575
吉田絃二郎（岡保生）576
吉本隆明（北川透）577
吉屋信子（村松定孝）578
吉行淳之介（鳥居邦朗）580

わ行

若山牧水（武川忠一）582

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

作品論と作家論——長谷川泉

まず、次頁に掲げた仰々しい表の解説から始めよう。この表は、至文堂刊の長谷川泉「近代名作鑑賞」第四版の「新編」(昭和四十二(一九六七)・五・三十)いらい、現在の「近代名作鑑賞」第五版にいたるまで掲げられているものである。方法論としての作品論・作家論を問題にするのに、読者にかかわる問題、方法論的には読者論に関連する契機が含まれていて、何か余分なように感じられるかもしれない。しかし、それは謬見である。作家論・作品論は、読者論との関連なしには論じられないものなのである。そのことは、後に説くとして、第五版の「近代名作鑑賞—三契機説鑑賞法70則の実例—」に凝縮するまでの書誌的事項に触れる。

現在の「近代名作鑑賞」に付載されている体系表と、それを裏づける方法論的理論「三契機説文学鑑賞法七十則」の初出は、「国文学解釈と鑑賞」(昭和四十二(一九六七)・六・一)であった。再録した単行本「新編　近代名作鑑賞」よりは一見、発表がおそいように見えるが、雑誌は六月号が五月中に出るから、雑誌論文に発表した表の方が発表が早いという事情がある。とにかく、雑誌発表の方が若干早く、単行本の方が再録ということになる。理論を増補して単行本に付載したのは、第五版(昭和五十二(一九七七)・八・三十)の時である。雑誌初出の時の原題は「文学鑑賞方法七十の原則」であった。

＊

この理論は、一九二〇年代から盛んになった、いわゆるニュー・クリティシズムに対する反論的骨格を持っている。New Criticism という言葉が最初に用いられたのは、一九一〇年、アメリカのコロンビア大学におけるジョーエル・スピンガーン(比較文学の教授)の講演においてであったとされる。ニュー・クリティシズムの紹介的文献は、細入藤太郎編『新批評』(昭和三十三(一九五八)　南雲堂)小川和夫・橋口稔『ニュークリティシズム辞典』(昭和三十六(一九六一)　研究社)、川崎寿彦『ニュークリティシズム概論』(昭和三十九(一九六四)　研究社)と辿られ、「国文学解釈と鑑賞」(昭和四十(一九六五)・六)でも、「文学研究とニュークリティシズム」の特集が組まれている。川崎寿彦は「国文学解釈と鑑

三契機説文学鑑賞方法70則

	a 発生	b 記述	c 発展
A 作者	1 顕匿 2 単複 3 確認	13 心理構造 14 心理記述	18 文学的個人様式の変遷
	4 家系 5 遺伝的要素 身体的条件 6 家庭と生いたち・人間形成	15 心理分析	19 文学以外の要因による変遷
	7 交友・恋愛 8 社会・風俗 9 教育・教養・思想 10 文壇・文芸思潮	16 心理形而上学	20 著作(者)人格の被害
	11 民族・種族 12 風土・自然環境 Aa	17 心理美学 Ab	* * * Ac
B 作品	21 成立史 22 制作年代	32 主題 33 思想・理念 34 登場人物 35 筋・構成	45 作品様式史
	23 素材と摂取 24 出典 25 原型	36 背景 37 盛り上げ 38 形象化と表現様式	46 流派様式史
	26 初出稿 27 推敲・改作 28 定本 29 創造部分との分離	39 文体 40 段落 41 用語 42 表記	47 精神史・思想史 48 問題史
	30 動因・意図 21 抑制 Ba	43 技巧 44 発表舞台 Bb	49 社会学的考察 Bc
C 読者	50 作者の読者意識	57 作品存在の認知	65 読者層の変遷
	51 有無 52 多算	58 真偽の認知 59 読解 60 享受	66 評価の変遷 67 影響
	53 恣意的受容者 54 研究者	61 追体験 62 批評	68 方法論の変遷 69 著作(者)人格の侵害
	55 享受者 56 批評家 Ca	63 研究 64 方法論 Cb	70 今後の発展と問題点 Cc

賞」(昭和四十(一九六五)・六〜四十一・十一)の連載に「作品をとく鍵―分析批評入門―」を理論篇として出し、のち各論を増補して『分析批評入門』(昭和四十九(一九七四)・六 至文堂)を出し、ニュー・クリティシズムとその後の動向をまとめている。本書付載の「参考文献」は「日本語の文献」「英語の文献」とに分類されていて、概要がよくわかる。長谷川泉『近代文学研究法』第四版(昭和四十七(一九七二)・五 明治書院)には「ニュー・クリティシズムとその批判」が一項目立てられ「ニュー―クリティシズム出現の地盤」「ニュー―クリティシズムの諸家」「ニュー―クリティシズムの理論」「ニュー―クリティシズムの理論批判」に分かって記述されている。なお長谷川泉・高橋新太郎編「文芸用語の基礎知識」'85四訂増補版(昭和六十(一九八五)・四「国文学解釈と鑑賞」4月臨時増刊号)では「ニュー・クリティシズム」(森常治)「分析批評」(井関義久)「記号学」(長谷川宏)が、要領のよい解説を加えている。

このように鳥瞰して来たところで、どうしても触れなければならないのは、H.R.ヤウス(Hans Robert Jauss)の『挑発としての文学史』(LITERATURGESCHICHTE ALS PROVOKATION)である。本訳書は轡田収によって岩波書店から一九七六年六月に刊行された。フランクフルト・アム・マインの Suhrkamp Verlag から翻訳原本が刊行されたのは一九七〇年であるが、原著者の「日本語版への序文」に

よれば、「挑発」の語を冠した大胆な提言は「一九六七年四月一三日、新設のコンスタンツ大学で行なった教授就任講演」での「挑発」であったとされている。

文学と芸術の歴史が、作家と作品の歴史に集約されていたのに対し、読者・聴衆・観客の意義と機能を持ちこんだところに、積極的な存在意義が認められる。ヤウスはこのモメントを「第三階級」と呼んでいる。ヤウスのこの「日本語版への序文」は終末に「一九七四年一〇月一〇日、コンスタンツ」と付言されている。この序文の背景の一つとなった、全世界的な社会的思想的動揺と思い合わせることができるもの言いということができる。「第三階級」という言い方は、歴史的、社会的には、第四階級を分化させることになったことは、言うまでもない。文学・芸術の世界で第四級階の台頭があったことは、文学史・芸術史の常識である。しかし、そのことに比して、芸術理論的、方法論の領域において、ヤウスが「第三階級」の言葉をもって、受容主体を作者、作品のモメントにからませたこと、受容主体の意義の確立が「挑発」の語をもってなされなければならなかったことを認識せざるをえない。元来、作者と読者の契機を、その作用において論じたものは、アリストテレスの「詩学」に発する歴史を持つ。

だが、ヤウスのインパクトは、パリでの一九六七年の五月革命、ドイツでは一九六七年の夏に起こった燎原の火のような大学改革の嵐の先取りの意味も持っていた。作者と作品の関連の機能と作用においては、既に Paul Merker と Wolfgang Stammler 共編の『Reallexikon der deutschen Literaturgeschichte,』1920 所収 S.r.Lempicki 執筆の「Literaturwissenschaft」に精細な解明があった。その点に示唆するものに、有名な志賀直哉の作品からの作者遊離説がある。

夢殿の救世観音を見てゐると、その作者といふやうな事は全く浮んで来ない。それは作者といふものからそれが完全に遊離した存在となつてゐるからで、これは又格別な事である。文藝の上で若し私にそんな仕事でも出来ることがあつたら私は勿論それに自分の名などを冠せようとは思はないだらう。

昭和三年六月　　直哉

右文は、改造社版「現代日本文学全集」(いわゆる「円本」)第二十四篇(背は「25」)「志賀直哉集」(昭和三(一九二八)・七・一)の目次裏の「序詞(筆蹟)」として掲げられたものである。同様の感慨は竜安寺の枯山水の石庭(作者・年代共に不詳)に対した場合にも起こるかもしれない。これは文芸の媒材としての言語と、仏像(彫像)の媒材としての木材その他の媒材との混同から起こったもので、芸術様式の基本的なジャンル論のおさらいからし直さなければならない問題を提起している。文学作品としての「暗夜行路」は、作者の意識がどのようなものであっても(上記のような感慨が作者にあっても)志賀直哉以外の創作主体の創造物ではありえず、作者か

ら「完全に遊離」させることはできない。そして、私が述べたそのような機構は、読者すなわち受容者の問題に帰し、受容美学にかかわってくる。文学においては、読者の契機は、簡単に無視したり、黙秘したり、隠蔽したり、秘匿したり、誤認したりはできない問題なのである。

ヤウスはやはり「日本語版への序文」の中で、従来の文芸学の三大パラダイムを、古典主義ないし人文主義、歴史主義ないし実証主義、美学ないしフォルマリズムとしてあげ、どのパラダイム（Paradigm）の変革の発端にも、巨視的に世界を見わたした場合の動向、たとえばプラーグ構造主義、ムカジョフスキイの記号論などが先行していることを認めている。「挑発」（Provokation）は、まさしく衝撃的なインパクトではあるが、その本質は、以上のように見てくると、文学を考える場合の本質的軌道を大きくはずれるものではなく、伝統的な路線への挑発的なものであったのである。

ただし、そのようなことは、本書の訳者轡田が巻末の「あとがきにかえて」でも、いろいろの言い方で述べていることと膚接するものを持つ。ヤウスは、ヤウスだったのである。その創見の一つ二つを、次のような記述から理解することができよう。「言語学ないし記号学は、発信者―メッセージ―受信者のモデルをとるコミュニケーション過程の分析に急であり、これを歴史の相やまして文学の分野で展開することに関心を示していなかった。メッセージに作品を、受信者に読者をあてはめて、文学の歴史過程の動因と考えたのはヤウスの創見なのである」。「受容美学は、作用を作者の意図ではなく、作品の構造要素としてとらえ返すのである」。

志賀直哉の言葉を引いたので、志賀に執したもの言いをするならば、救世観音ではなく、『暗夜行路』は、作家志賀直哉という強烈な個性（その個性を形成した要因は、冒頭に掲げた表ではAaという位相において解明することができる。手がかりのない古典などと違って、近代作品の場合には、手がかりとなる因子は、あまりにも多く伏在しており、その選別に読者ないし研究者の眼力のたしかさが要請される。）によって支えられる要素が強い。ゆえに、文学においては、作品は原則的に、作者から「遊離」することはできないのである。いわんや「完全に遊離」などできるわけがない。ただし、この場合に、表覧の「C」の契機を重視しなければならないことが重要となる。その眼力に狂いが生ずれば、作品は死んでしまうことも起こりうる。あるいは愚劣な文学史が形成されることになる危険がある。文学史における作者問題が疎外されないのは、その故である。作品を核として、作者と読者との血縁関係は、そのように理解することができる。文字通り、切れば血が出るのである。「B」の作品そのものの構造を形成する因子は「Ba」「Bb」「Bc」において見られる。方法論的には多彩であっても、素描的に整理すれば、簡明である。そして、いずれも「C」の契機と濃密に結んでいるのである。

文学史的視点——平岡敏夫

文学史的視点とは何か　一応二つに分けて考えてみよう。㈠近代文学研究の対象として、ある作品、ある作家が置かれた場合、「文学史」という視点をつねに意識してかかるということ。これにつきるであろう。しかし、㈡ある特定の作品や作家を対象とするだけではなく、まさに「文学史」それ自体をまず対象に据えるという視点に立って、近代文学研究を行うということ。㈡の意味での文学史的視点に立つ卒業論文等にはなかなかお目にかかれないが、卒論にかぎらずこの種の試みは大いにあるべきで、㈠の視点を推し進めて行けば、㈡になって行く可能性はじゅうぶんある。㈡にならねばならぬというのではなく、㈡になって行く可能性を持つような㈠でありたいというのが私の考えである。

「文学史」とは何か　ここで前提になっている「文学史」というのがまた問題で、「文学史」とは何かという問題につきあたるのであるが、この問題にふれながら文学史的視点に入ってみよう。「文学史」は形としては叙述されなければ見えてこないが、日本で「文学史」が叙述されるのは明治二十三年になってのことである。「本書は実に本邦文学史の嚆矢なり」とその緒言にうたった三上参次・高津鍬三郎『日本文学史』（上下）が刊行されたのは明治二十三年十月であるが、北村透谷が「文学史の第一着は出たり」（明治二十三・五）で評した関根正直『小説史稿』はこの年四月の刊行である。同月に芳賀矢一・立花銑三郎『国文学読本』、翌五月に上田万年『国文学』（巻之一）が出ているが、いずれも時代順に本文を並べた教科書的性格のものであるため、あえてこの二人の青年学者は『日本文学史』を書名も体系もそれにふさわしい日本文学史の最初と自負したのであろう。これらは明治以降に及んでいないが、「明治文学史」とはじめて名乗った叙述は、山路愛山「明治文学史」（明治二十六・三～五）であり、北村透谷「明治文学管見」（原題「日本文学史骨」明治二十六・四～五）がつづき、最初の単行本としては大和田建樹「明治文学史」（明治二十七・十）が明治二十六年十二月に内務省許

可（翌年出版）となっている。

明治二十三年における「文学史」の集中、三年遅れて明治二十六年における「明治文学史」の集中（内田不知庵『現代文学』〈明治二十四・十一～二十五・一〉を萌芽と考えるとしても）はたんなる偶然ではなく、私の仮説によれば、文学史は集中するという必然性によるものである。文学とは何かがはげしく問われる文学論争の時期に「文学史」は集中するのであるが、それは各自が抱く文学像を歴史的に実証せんとして過去をふりかえり、「文学史」叙述に至るというように考えることができよう。事実、明治二十三年には文学極衰論争・『浮城物語』論争があり、明治二十六年には人生相渉論争があり、その間には逍鷗論争があった。

個々の「文学史」そのものを対象とする研究を「『明治文学史』研究序説」（昭和三十九・二「文学」）より開始して、二十年余の歳月が立つ。ひと区切りにも達しないまま中断した形であるが、この種の研究は最初にあげた「文学史的視点」の(二)の極北と言ってよかろう。叙述された「文学史」それ自体の研究などはまれなケースであるから、「文学史的視点」の(一)のためにはやはり「文学史」ということにもう一歩入って見なければならない。

文学史は歴史の一種にして、文学の起源、発達、変遷をしるすものなり。さて、歴史の本体にも、世界史と各国史との別あるが如く、文学史にもまた世界文学史と各国文学史との二種あるなり。前者は普く各国を綜合して、人智の発達進歩を、文学上より観察したるものにして、後者は一国内にあらはれたる文学上の現像を、歴史的に叙述したるものなり。

「日本文学史上巻」総論第一章「文学史とは何ぞ」の書き出しだが、このあと政治、宗教、人情風俗に動かされる文学も、「益、発達するに従ひては文学其物のうちに一種の元気を蓄へ、却りて政治、宗教、人情、風俗を左右するに至るものなり」と文学の優位性をも認めつつ、古今東西の「文学史」に及び、第二章では「文学の定義」をめぐって詳述、第三章では「文学の目的」、第四章に入っては「国文学（ナショナル、リテラチューア）」を論じている。

ナショナルな発想とテーヌ受容　「国文学」とはその国の固有の特質をそなえる文学をいうのだが、「文学に対して、影響を及ぼし、以て各種の国文学を構成する個条（エゼント）を、大別して三ツとなす」として第一「国民固有の特性」、第二「身外の現像」、第三「時運」をあげている。これがイポリット・テーヌの『英文学史』序文にいう「人種（ラース）」「環境（ミリユー）」「時代（モマン）」によるものであることは後に「仏国の碩学テイン」の名が引かれていることによっても明らかである。テーヌは「人種（ラース）」を最も重視し、「これが歴史的諸事象を作り出す主要活力の第一の最も豊かな源泉である。」（瀬沼茂樹訳）としているが、『日本文学史』にいう「国民固有の特性」は、「世界各国の人民、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com